平成２６年度
清水町教育委員会の活動状況に関する
点検・評価報告書

点検･評価の概要

教育委員会は、地方教育行政の組織及び運営に関する法律により、毎年、事務の管理・執行の状況について点検・評価を行い、その報告書を議会に提出するとともに公表することが義務付けられています。

また、その際、客観性を確保する観点から、教育委員会以外の学識経験者による知見の活用を行うこととなっています。

清水町教育委員会としては、この点検･評価を、本町の教育資源を有効活用し効果的な教育行政の推進を図るための確認の機会であると捉えるとともに、住民への説明責任を果たすことができるように進めていきます。

評価対象は、年度当初に示す教育行政執行方針に基づき実施する事務事業のうち、本町の教育行政として特色ある事務事業としました。

また、点検・評価報告書の作成にあたっては、選定した事務事業の推進状況を自己評価し、外部知見の活用として学識経験者※から意見をいただき、今後の教育行政に活(い)かすこととしています。

なお、報告書は毎年度議会へ提出し、公表します。

※学識経験者として、北海道教育庁十勝教育局及び前教育委員会委員長職務代理者からそれぞれご意見をいただきました。

点検･評価した項目

清水町の教育行政の中で特色ある事務事業として次の８項目を選定しました。

① 町民総ぐるみの“しみず「教育の四季」”の推進
② 全国学力・学習状況調査の結果を受けての取組
③ 就学前教育を重視した幼保・小連携教育の推進
④ 小学校における低学年からの外国語（英語）活動
⑤ 「おいしい笑顔が見える給食」と「地産地消」を意識した食育の取組
⑥ 生活習慣を身につける生活向上推進事業
⑦ 地域の教育力を活用する生涯学習ボランティア登録派遣事業
⑧ 子どもたちへの読み聞かせを中心とした図書館ボランティアの活動

①　町民総ぐるみの“しみず「教育の四季」”の推進

現状と成果

清水町の教育理念「心響」～打てば響く　心に響く～を基軸として、「心を通わせ、互いに響き合う感性豊かな教育の推進」を目指し、実践指標　“しみず「教育の四季」”を平成１８年４月に宣言してから９年になりました。以来、家庭・学校・地域が連携して、「あいさつ、返事、後片付け」「早寝、早起き、朝ごはん」など、主として子どもたちの基本的生活習慣の定着を図るための取組を展開してきました。本年度についても、４月に推進協議会を開催し、前年度の実践の成果と課題を踏まえた中で、町民が一丸となって子どもたちを守り育てる“しみず「教育の四季」”の取組を推進しました。

本年度の主な具体的な取組としては次のとおりです。

①４月に「教育の四季」リーフレットを町内小中学校及び保育所･幼稚園を通じて家庭に配布する。②中高連携としてのサイエンス･サマースクールを開催する。③「子どもフォーラム」を本年度は多くの町民の方にも参加してもらうため、文化センター大集会室で開催した。“しみず「教育の四季」”の取組を町内小中高の児童生徒の代表が発表し、その後「スマートフォン(携帯)」について参加者を含めて意見交流を行った。④町内各保育所や幼稚園の保護者参観日に「教育の四季」の趣旨や取組について説明し、就学前教育の重要性について周知する。⑤町内保育所、幼稚園、小中高校からの「ちょっといい話」を集約し、各所属所へ配布するとともに町のホームページに掲載し、清水町の幼保小中高の取組を積極的に発信する。

今後の課題

・子どもたちの実態として①家庭での読書の時間が少ない②家庭学習の時間が少ない③テレビ・ゲームの時間が多い④身の回りの整理整頓が苦手とする子が多いことがあげられます。家庭学習の習慣化や読書の時間の確保については、家庭と学校の連携を取りながら定着を図る必要があります。
・町民総ぐるみの教育活動を展開するために、各町内会組織及び各種団体等への浸透を図っていくことが大切です。
・地域・学校・家庭が互いに協力し合い、子どもたちを守り育てるという共通の目標と一連の活動の評価と情報をみんなで共有していくことが大切です。

今後の対応策

・来年度は“しみず「教育の四季」”の宣言から１０年を迎えます。町民全体へより一層の浸透を図るため、講演会を開催します。
・第９回「子どもフォーラム」を実施します。町内各小中学校児童会・生徒会及び高等学校生徒会の“しみず「教育の四季」”の取組を発表するとともに、参加者からの意見を聞き、今後の方向性を明らかにします。
・スマートフォン(携帯)を含めたソーシャルメディアのガイドラインを作成し、町全体での取組を推進します。
・学校を基軸として、保護者と地域住民が相互に協力し合える体制づくりに努めます。そのためにも清水町の幼保小中高の取組を積極的に発信していきます。

学識経験者の意見

情報モラル等について考える意見交流会や思考力を高めるサイエンス・サマースクールの取組など、「生きる力」の基礎を培っており評価できます。

今後は、地域・家庭・学校が教育に関する課題を共有し、町民が一体となって子どもを守り育てる取組の一層の充実を期待します。

生活リズムの確立や感性豊かな子供を育てる、地域ぐるみの取組である“しみず「教育の四季」”は確実に定着し広がりを見せています。「生きる力」の基礎を養う大切な取組として評価できます。

今後は、これまでの活動を通して見えてきた課題を関係機関・団体が一体となって共有することで、子供を守り育てる“しみず「教育の四季」”の一層の充実が図られると思います。

②　全国学力・学習状況調査の結果を受けての取組

現状と成果

義務教育の機会均等とその水準の維持向上の観点から、小学６年生及び中学３年生の全児童生徒を対象とする全国学力・学習状況調査が国語と算数・数学の２教科で、４月２２日に清水町の全小中学校４校で実施されました。

文部科学省は８月２５日にその調査結果を公表しましたが、本町における教科に関する調査（国語、算数・数学）の平均正答率は、小学校では全教科が、中学校では国語Ａ、国語Ｂが全国平均を上回りました。中学校の数学Ａ、数学Ｂについては、全国平均を若干下回りましたがほぼ同レベルで、多くの児童･生徒が概ね学習内容を理解し、全体的に基礎・基本の定着が図られ、それを活用することも身に付いているようです。しかし、調査結果から課題も見られ、なお一層、指導の工夫・改善等を図る必要がありました。また、学習状況に関する調査では、全国に比べ規範意識が下回っている傾向にありました。

これらの調査結果を踏まえ、教育委員会として学力向上支援プランを作成し、町のホームページで公表しました。また、各学校に学力向上支援プランを示し、各校においても調査結果を生かした今後の指導について具体的方策をまとめ、保護者にお伝えするとともに、放課後や夏冬休みの学習機会の確保など学習支援の工夫をしたところです。

今後の課題

・本調査で測定できるのは、一部の学年と学力の一部ではありますが、調査結果を受けて各学校で学力・学習状況を把握・分析して、教育の成果と課題を継続的に検証し、学習指導の工夫・改善に役立てていく必要があります。

・本町の中学校においては、自尊感情、言語活動・読解力について高い傾向がみられ、学習への関心も高く生活習慣、学習習慣が定着しています。一方、小学校では、規範意識、自尊感情が昨年と比較して下がり、生活習慣、学習習慣も全国平均を下回る結果となりました。これまで取り組んできた小学校低学年の少人数学級や“しみず「教育の四季」”などの実践の成果も見えていますが、調査結果で明らかになった課題を踏まえ、今後も粘り強く、各学校、家庭、地域において子どもたちの学力向上のための効果的な取組を意欲的に充実していくことが大切です。

今後の対応策

・各学校との連携を図るとともに、小学校低学年における少人数学級の継続、幼保・小連携を重視した就学前教育の充実を推進し、児童生徒の学習意欲を高めるための学校の取組を支援していきます。

・規範意識の向上による学習習慣の確立や、基本的な生活習慣の育成を図り、学びに向かう姿勢の向上のため、“しみず「教育の四季」”の普及啓発を推進します。

・教員の資質向上については、学校教育課教育指導幹の学校訪問、外部講師の活用、十勝教育局指導主事派遣の要請、地域の人材による学習指導に関する支援体制を工夫していきます。

学識経験者の意見

教育委員会としての学力向上支援プランを学校に示し、各学校においても今後の指導の具体的方策を保護者に示すなど、学力向上の取組を進めており評価できます。

今後は、分かる喜びのある授業改善と望ましい生活リズムの確立について、義務教育の９年間で地域・家庭・学校が一体となった取組の尚一層の充実を期待します。

調査結果を踏まえ、学習指導の工夫・改善に努めている努力が見られます。

また、小学校低学年の少人数学級の成果が、その後の学習意欲につながり良い結果が出ているものと考えられ評価できます。

今後も、学校・家庭・地域と課題や改善策を共有し、学力向上の取組を進めて頂きたいと思います。

③　就学前教育を重視した幼保・小連携教育の推進

現状と成果

平成１５年度に「特区」を活用した小学校低学年における２０人程度の少人数学級を具現しました。これは、生活集団と学習集団の一体化の中で、規範意識や躾、マナーの日常化を図るきめ細かな学習環境を整備するものでした。

その理念の延長線上に、就学前教育の充実の必要性を強く感じられたことから、町内の幼稚園・保育所と小学校のなめらかな接続を図るために、①教育課程と保育計画とのつながり、②教師と保育士との連携と研修、③幼児と児童の学びと遊びの交流などの視点から調査・研究を進めました。調査・研究は、平成１７年度から２ヵ年、道教委の委託を受けて、理念と実践とを指導機関の協力のもと進め、平成１９年度以降は、２年間の調査研究事業の成果と課題を踏まえ、無理のない範囲で幼保・小のなめらかな接続を図る取組を継続実施しています。

具体的な取組は、清水地区と御影地区の２ブロックに連携推進会議を設け、幼児と児童の交流はもちろんのこと、教師と保育士との交流及び研修を通して互いに指導・援助の違いなどの共通理解を図り、発達や学びの連続性を重視した活動を行っています。

平成２６年度は、ブロックごとの推進の協議、授業参観、児童と年長児の交流、職員間の交流、研修会の開催など昨年同様、積極的に実施しました。また、この取組が、更に小学校と中学校、中学校と高校との連携に発展しています。

今後の課題

・基本的な生活習慣や思いやりの心をはぐくむ教育活動を幼稚園・保育所、小学校が同じ目線で一貫した取組をしていくことが大切であり、教師と保育士との間の情報交流や相互理解を図るためにも幼保・小連携の継続的な取組が求められています。そのために、連携の取組を継続することの重要性を全体で認識し、交流活動のねらいや方法について改善を重ねていくことが大切です。
・連携を図るためには、保護者や地域の理解や協力を広めることも必要となります。

今後の対応策

・新しい保育所保育指針や幼稚園教育要領、小学校学習指導要領においても幼保・小連携が明記され、今後も重要な課題として位置づけられました。道内においても先進的な取組事例として高く評価をいただいているところですが、無理なく継続することが大切であり、清水町幼保・小連携協議会では連携の柱となる骨格を協議し、実践面の取組は各ブロック推進会議で担当教員を中心に連携を推進していきます。
・平成２３年度から幼稚園・保育所でのアプローチカリキュラム、小学校でのスタートカリキュラムの作成に取組、そのことで幼稚園・保育所と小学校での取組について相互理解が生まれてきています。継続してカリキュラムの充実を図ります。
・幼保・小連携推進会議の便り「つらなり」を年３回町内に回覧し、活動内容を発信していきます。

学識経験者の意見

幼保・小連携協議会の下、平成２３年度からアプローチカリキュラム及びスタートカリキュラムの改善・充実に組織的に取組んでおり評価できます。

今後は、文書と口頭の引継ぎに加え、園・学校体制による引継ぎを充実するなど、幼保・小の円滑な接続に向けた取組の一層の充実を期待します。

幼保・小の連携の必要性を強く感じ、逸早く実践に踏み切った事は大変良かったと思います。

その後、アプローチカリキュラム、スタートカリキュラムが作成されるなど、連携に深みがまし確実に成果が上がっていることは素晴らしいと思います。

今後は、これまでの実践で得た成果や課題を検証し取組の一層の充実を期待します。

④　小学校における低学年からの外国語（英語）活動

現状と成果

清水町の子ども達が大人になったときに、外国語（英語）で日常のコミュニケーションができるようにするために、外国語や外国人の存在を柔軟に受け入れることができる小学校低学年（１～４年生）からの外国語活動を平成２６年から実施しました。

子どものもつ好奇心を捉え、主体的な活動への参加を促すことが大事だと考え、何よりも「英語が好き」「活動が楽しい」と子どもたちが思える小学校低学年からの外国語活動を実施することができました。

①外国語（英語）活動の段階

低学年～英語に触れる（歌やゲーム）

中学年～英語に慣れる（挨拶や単語）

②年間授業時間数

１年生：１０時間、２年生：１２時間、３年生：１５時間、４年生：２０時間

③基本的に担任が指導。

補助として英語活動講師・英語指導助手が当たる活動を行った。

今後の課題

・開始年度のため、指導内容についての検証が必要となります。

・担任の指導力の向上を図ることが必要です。

・保育所、幼稚園でも平成２５年１０月から英語活動を実施しており、連携して実施することが大切です。

今後の対応策

・指導内容については検証し、これからも工夫した楽しい授業づくりを進めます。

・担任の指導力の向上に向けて、研修会への積極的な参加を推進します。

・保育所、幼稚園でも、小学校と同じ英語活動講師、英語指導助手が指導を行っているので、さらに一貫した指導を進めます。

学識経験者の意見

子どもの発達の段階に応じた周囲と交流する学習活動を設定するなど、人との関わりの中で言葉を用いる経験を積ませようとしており評価できます。

今後は、教育課程への位置付けを明確にし、高学年の外国語活動への円滑な接続を意識した教材の作成、指導内容及び評価方法の開発に係る取組の一層の充実を期待します。

物事に対して柔軟な小学校低学年から英語活動を取入れる事は、外国語や外国人の存在を身近に感じると共に、言語や文化についてより理解を深めコミュニケイションを図る能力が高くなると思います。

小・中・高と一貫して「英語が好き」「英語が楽しい」と思える事が大事だと思います。

これからも更に指導の内容を検証し一層の向上を図っていただきたいと思います。

⑤「おいしい笑顔が見える給食」と「地産地消」を意識した食育の取組

現状と成果

食育については、「おいしい笑顔が見える給食」と「考える給食」を合言葉に、毎月発行の「給食だより」で、給食を通して児童生徒に正しい食事の取り方や望ましい食習慣を身に付けさせるなど、食に関する指導の充実を図るとともに、地元産の食材を多く利用したメニューを取り入れています。

また、給食センターに隣接する試験ほ場の耕起作業などを関係機関の協力で整備し、栽培した大豆を小学校児童の給食センター見学の際に収穫体験させ、実際の給食に使用しました。

さらに、学校における食育を推進するため、一般財団法人都市農山漁村交流活性化機構主催の第７回地産地消給食等メニューコンテストに清水町学校給食センターとして参加し、学校給食での地場産物の使用率が高い点や地産地消の取組活動が評価され、北海道農政事務所長賞を受賞しました。コンテストに出品した給食メニューについては、新聞等に紹介され、内外に食育の情報を発信しました。

なお、独自メニューとして次の取組を行っています。

①十勝清水の恵み給食～清水産の食材を使ったメニューとすることで、町内ではどのような食物が生産・加工・販売されているのかを理解することに役立っています。

②全国学校給食週間特別献立～小学校６年生児童が考えた献立を、全国学校給食週間の一環として実際に提供しました。家庭科授業と連携した取組により、地場産物と町内生産者への理解が深まり、給食献立作りへの子どもたちの関心も高まっています。

③バイキング給食については、小学校６年生、中学校３年生の卒業を祝うため実施しています。

今後の課題

・共同調理施設は、現施設が平成９年度に整備されてから１８年を経過しており、調理設備の故障や器具・備品の傷みが激しくなっており、衛生管理面からも適切に設備や備品の更新を図っていく必要があります。

・学校給食における異物混入が発生し、喫食児童への健康被害は無かったものの、適切な危機管理が実施できるよう、従来以上に安全で安心な給食提供が求められています。

今後の対応策

・平成２６年度に作成した「学校給食における危機管理マニュアル」を活用し、異物混入及び食中毒の対応並びに発生防止対策を徹底します。

・地産地消の推進のため地元農業者等との連携を継続するとともに、地場産物を活用した献立を給食提供し、町内生産者への理解につながるよう児童生徒の興味関心を高め、感謝の心を養います。

学識経験者の意見

地産地消のメニューを工夫し、多方面から好評を受けるなど、子どもの地場産品への興味・関心を高める取組を行っており評価できます。

今後は、「学校給食における危機管理マニュアル」を活用し、安心・安全で望ましい食習慣を身に付ける取組の一層の充実を期待します。

「地産地消」の推進の中で清水産食材の生産・加工・販売等の理解と作物に対する生産者の思いや、収穫に至るまでの苦悩を感じ取り、食に対する感謝の気持ちを育んでいると思います。

これからも、給食が望ましい食習慣を身につける一助となる事を期待します。

⑥　生活習慣を身につける生活向上推進事業

現状と成果

家庭におけるライフスタイルの変化により、人や社会との関わりが子どもに不足し、生活体験や自然体験の豊富な子どもほど、道徳観や正義感が身に付いているといった調査結果が出ています。

この様なことから、児童期に「早寝、早起き、食事、後片付けなど」の基本的な生活習慣を保護者に理解してもらうことが重要であると考え、事業を実施しています。

本年度は８回目の開催となり、昨年の事業反省をふまえ、清水小及び御影小に直接依頼した結果、御影小から７名の申し込みがありました。

指導者は、職員６名と協力スタッフとして、町女性団体連絡協議会、町更生保護女性会より２５名のご協力を頂き運営を行いました。

子どもたちはモデル的生活リズムでの生活により、普段体験することの少ない家事全般を体験し生活することの苦労を実感し、家族（お父さん・お母さん）のありがたさを感じたようです。

今回の通学合宿には昨年から継続して１名が参加し、初めて参加する児童の良き模範となり、生活習慣に対する知識と経験を仲間とともに実体験することで更なる成果が得られたと感じました。

また、研修終了後の保護者へのアンケート調査からは、普段の生活リズムの反省と改善意識が見られ、家庭教育事業として、効果が見られました。

今後の課題

・通学合宿事業の成果が達成されていることから、今後は体験事業を見直し、啓発事業へのシフトが望ましいと考えます。
・参加者に偏りがあるため、均衡ある申込となるような啓発が必要です。

今後の対応策

・参加した児童が習慣化できるよう、保護者の理解と子どもの生活リズムの重要性をアピールする啓発を継続します。

学識経験者の意見

子どもは、生活体験活動を通して望ましい生活習慣の定着が図られ、保護者においては、家庭における生活リズムの改善意識が高められるなど評価できます。

今後は、子どもたちがリーダーやスタッフとして参加できる仕組みを整え、地域の人づくりやボランティアの育成に関する取組の充実に期待します。

ライフスタイルの変化で、本来あるべき子供の生活リズムが崩れてきており、その様な中で参加した子供たちの、生活リズム向上にむけた取組と、保護者の意識向上に大きな役割を果たしていると思います。

この事業で得た、生活リズムに対する重要性を学校・家庭と共有し、児童・生徒が正しいリズムで生活できる環境が出来る事を期待します。

⑦　地域の教育力を活用する生涯学習ボランティア登録派遣事業

現状と成果

町民のボランティア意欲をまちづくりや生涯学習活動に活かす「生涯学習ボランティア登録・派遣事業」を平成１４年度から実施しました。

この事業は、個人が仕事や趣味で得た知識や技術を町民の学習活動に還元したいという方や、教育事業や教育施設に対して貢献したいという方を登録し、学習講師や活動支援として求める町内の団体・組織に派遣します。

この学習成果の還元と人と人を結びつけることにより、互いに学び合える町づくりを促進することをねらいとした事業です。

社会教育分野での派遣要請は僅少でありますが、芸術分野等の専門性が求められるボランティアに対しての要請がありました。

登録者は、芸術文化やスポーツ、教養などの分野で５３名おり、学校教育活動に対する支援者が多くを占めました。

活動分野と活動者が年々固定化してきているため、ボランティア活動が社会から評価されるよう広報誌を活用し、事業 PR とボランティア活動の活発化に努めました。

このように、生涯学習ボランティア事業による町民の学習活動に対する支援の仕組みを構築した成果であり、協働の町づくりが着実に推進されている表れであります。

今後の課題

・継続したボランティア活動を活性化するためには、活動者や学校等の負担軽減と活動における調整者と手当てが必要です。

今後の対応策

・ボランティア意識を高めるために、活動が社会から評価される広報を継続します。
・ボランティア活動の活発化に向けて、職員による調整を継続します。
・ボランティアが負担している消耗品等を公費で補います。

学識経験者の意見

生涯学習ボランティアの活動が、住民に評価されるよう積極的に広報活動等に取組、住民の学習活動に対する支援が構築されてきており評価できます。

今後は、学習で得た知識や技能をまちづくりやボランティア活動などに生かすことができるよう、地域で場の創出や学習情報の提供、相談体制の充実を期待します。

生涯学習ボランティア事業は、学習したい人と知識や技術を町民に還元したい人を結びつけ、互いに学びあえる町づくり活動に欠かすことの出来ない事業と考えます。

今後、更にボランティアの拡充と町民の意識向上を促し、本事業が一層活性化することを期待します。

⑧ 子どもたちへの読み聞かせを中心とした図書館ボランティアの活動

現状と成果

図書館の読み聞かせボランティアとして平成４年に結成された『五月会』の会員は現在５名で、毎月第２、第４土曜日に図書館で行うお話し会のほか、小学校・幼稚園・保育所での講演依頼に応じており、安定した活動をしています。

７月、１２月に行った特別講演は、今年度も小学生が読み手として参加したほか、清水高校ボランティア部の応援参加があるなどボランティアの広がりが出てきました。（平成２６年度お話し会（１２月末現在）１６回開催、延べ３２０名参加）

今年度は、初の試みとしてＡＥＴのアシュリー先生による英語絵本読み聞かせを行ないました。

今後の課題

・『五月会』は安定した活動をしていますが、会員の固定化、高齢化の解消には至っていません。
　読み手育成講座を開催していますが実際の活動につなげるには時間がかかりそうです。

今後の対応策

・引き続き、読み聞かせ用の資料・情報提供などの活動支援を行います。
・新たな読み手の育成につながる講座を継続して行うことで、潜在ボランティアの開拓を行います。

学識経験者の意見

高校ボランティア部の応援参加、ＡＥＴによる英語の読み聞かせを行うなど、新しいボランティア活動の拡充として評価できます。

今後は、読書活動ボランティアの育成や新しいサークルの立ち上げを促すとともに、既存するサークルの活動機会の拡充を期待します。

「五月会」は会員の高齢化が懸念されますが、小学生が読み手となる特別講演や絵本カフェの取り組みなど、努力している事が感じられ評価できます。

今後、読み手の育成については、学校の協力を得てＰＴＡにもはたらき掛け、育成講座への参加を呼び掛けたり、新しいサークルの立ち上げを促すなど、読み聞かせボランティア拡充の取組が必要と思います。